

Interview

変わるものと変わらぬもの

竿師を代表するお二人に、紀州へら竿の昔と今、そしてこれからの展望などについてお聞きしました。

昔は日常に釣りがあった

私たちが子どもの頃は、橋本駅前
は飲食店なども多くにぎわっていま
した。紀伊清水駅前には多くの竿師
が住んでいたの、修行に来てい
る人などを集めてみんなで野球をした
ものです。当時の子どもたちは、紀
の川や近くの池などいろんな所で遊
んでいましたね。昔はそうだった所
で遊んで、水の怖さを自然に覚えて
いったのですが、今は簡単に釣りに
もできない状況になっているのは残
念ですね。

竿師になるということ

親が竿師で、小さい時から釣りを
楽しんでいたので、「蛙の子は蛙」
といったように、竿師になることに
迷いはありませんでした。親がして
いる仕事があるので家庭では一般的
な仕事となるように、竿師の一家では
師になるのが一般的でした。
最盛期は竿師が200人ほどいま
した。現在では、組合員は31人、実
際に竿を作っているのは20人程度と
なりました。

作った竿に責任をもつ

現在、竿師になるためには、工匠
房での修行が約2年。その後は親方
に付いて、さらに2年間修行すると
いった流れで、全てを習得するの
に約4年は必要になると思います。も
ちろん人それぞれですので早くなる
人も遅くなる人もいます。
修行時代が大変という人もいま
すが、その頃は親方の言う通りやれば
いいのが、独立してからは自分の竿
に責任をもつことになりますので、
そうはいきません。また、竿は飾つ
ておくものではなく釣り道具ですか
ら使ったあとの結果が重要です。最
初の頃は自身の作った竿に故障など
のトラブルがあればよく親方に相談
しながら解決していました。



伝統の中にある工夫

竿の握りなどは独立するにあたつ
て親方から受け継ぐ場合もあれば新
しく工夫する場合もあります。
昭和40年代に入ると、カーボン竿
などが世に出回り始め、当時の竿師
たちは紀州へら竿をどのように守つ
ていくかを考えました。その結果、
握りを工夫し、「個性を出す」とい
う答えを導き出しました。また、当
時へらブナが大きくなくなったことも
あり、それに対応した竿作りも研究さ
れました。基本の作りは百年以上同
じであつても少しずつ工夫がなされ
ています。
このような創意工夫の結果、アジ
ア地域では、紀州へら竿が優れてい
ると広く認識を持っていただいでい
ます。海外の皆さんが見た目以上に
その機能性の部分を理解してくれて
いるのでうれしく思います。

伝統的工芸品として

平成25年に国の伝統的工芸品とし
て認定されましたが、竿を販売する
上では大きく変化はないと思います
ただ、その後に伝統工芸士になり、
それが肩書に加わったことで、国
の支援を受けていることに責任感を
感じるようになりました。また、こ
れまで釣りに関わっていない人の目
にも触れ、メディアでも取り上げら
れる機会が増えたことに竿師として
やりがいを感じています。



親しみのある伝統に

これまで百年以上続いてきた「紀
州へら竿」の伝統を受け継ぐため
には後継者育成と魅力を伝えていく
ことが最も重要であると考えていま
す。紀州へら竿を知っていただく取
組みの一つとして、地元小学生を対
象とした釣り体験を行なっています。
これは全国的に有名な伝統的工芸品
と釣り池が地元にあることを知って
もらい、いずれまた釣りに来てくれ
ることを期待して毎年開催していま
す。それ以外にも、市内外から多く
の学生たちがへらブナ釣りを体験し
楽しんで帰ってくれていますので、
組合としてはこれからもできる範囲
において受入れを続け、多くの皆さ
んに紀州へら竿の魅力を知ってもら
いたいと思っています。
かつては多くの人が教える側に
いた竿師の世界ですが、今はそうで
ない現状にあります。竿師個々にか
かる負担が大きくなっているの
で、何とか後継者を育てることを目標
に組合をあげて取り組んでいきたい
と思います。

直面する課題

材料と後継者不足が課題であると
感じています。現在活動している竿
師は、一定量の材料を持っています
が、今後後継者を育成し、その人
たちが竿作りを続けていく場合には影
響が出るのではないかと懸念します。

匠の技で未来を切り拓く

本市の地場産業である「紀州へら竿」は国内だけでなく海外にも誇れる逸品です。その良さを感じる第一歩は、竿を実際に手に取って質感を感じ、その竿でへらブナを釣り上げる自身の姿を想像することから始まります。
本市では、その機会が増えるよう、これまで釣りイベントや展示会の開催を支援してきました。今後は「紀州へら竿」のさらなる販路拡大を目指し、インターネットを活用して海外に向けて情報発信を行なっていきます。また、引き続き紀州製竿組合や南海電気鉄道株式会社と協力することで地域活性化はもちろん、来年で140年を迎える「紀州へら竿」という色褪せない伝統を今後150年、200年と後世に伝えていきます。



米田 護氏

昭和59年に竿銘「瑞雲」として独立。
平成31年4月から紀州製竿組合の組合長を務める。
使いやすい竿を念頭に個々の要望に応じたきめ細かい作品が特徴。



山上 寛恭氏

昭和50年に竿銘「こま鳥」として独立し、令和2年度和歌山県名匠表彰および令和2年秋の叙勲を受章。
卵殻の技法を使い、鳥や虫などのデザインを施した握りが特徴。

